**佐々並市**

江戸時代（1603～1867）、佐々並市は、三田尻へ向かう萩往還の2番目の中継地だった。萩往還は山を越えて、萩と瀬戸内海の港町・三田尻（現在の防府市）を結んでいた。1604年に完成した萩往還は、大名の毛利家が参勤交代で江戸に向かうのを容易にするため、長州藩都の萩と藩内のその他の領地を結ぶために建設されたものである。

1600年の関ヶ原の戦いで敗れた有力大名の毛利輝元（1553～1625）は、戦勝した徳川家康（1543～1616）によって領地の大幅縮小、移封を余儀なくされた。家康は輝元に広島城を出て、本州最西方の萩に移るよう命じた。輝元と家臣たちは、その道中で佐々並に立ち寄り、長松庵で休息した。この村に惚れ込んだ輝元は、寺を自分の管理下に置き、大名や随行者が山を越えて江戸に行き来する際に休息したり、宿泊したりできるように、茶屋に改造するため費用を投じた。萩城完成から2年後の1606年、輝元は佐々並市と萩を結ぶ街道沿いに62軒の町家建設を命じた。これらの家々は、上ノ町、中ノ町、久年の三地区に分けられた。

3つの地区はそれぞれ農業を営んでいたが、それぞれの役割も持っていた。上ノ町は旅人に宿を提供していた。中ノ町には酒造、油屋、酢醤油屋、豆腐屋、米屋、鋳物屋、鍛冶屋などの商人や職人が住んでいた。久年は交通のための馬を提供していた。

1865年、佐々並市は長州藩内の対立する武士グループ同士の小競り合いの舞台となった。「佐々並の戦」と呼ばれるこの戦いでは、12軒の家が焼失し、5人の武士が殺された。この一件以外は、佐々並は、1600年代から続く小さな、静かな町であった。ほとんどの家屋は19世紀に建てられたものであり、2010年には文化庁の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定された。

地域の建物の多くは、文化庁の支援を受けて修復されてきた。現在、江戸時代後期の最盛期の住宅や遺跡が数多く残っている。豆腐屋であり旅館でもある林家は20XX年に、旧小林家住宅は2015年から2017年にかけて1億円をかけて完全復元された。元々は旅館だったという風通しの良い2階建ての建物は、客が他の客に迷惑をかけずに部屋に入ることができるように会談が2段になっている。屋根の梁と平行になって玄関が正面に位置しているのが特徴で、平入造りの建築様式の好例である。

佐々並市の注目すべき建築としては他にも、居酒屋だった大津商店、佐々木邸、三浦邸、大野邸などがある。最後者は、元の建物が1860年代後半の佐々並の戦で焼失した後、この地に建てられたものである。典型的な農家の家で、元々は寄棟造りの茅葺き屋根だったが、昭和期（1926～1989）に瓦屋根に取り換えられた。